

# 危機を脱した世界遺産

## 第7回「ヴィエリチカ岩塩坑」

●ポーランド共和国／マールウォポルスカ県  
1978年登録 登録基準は iv

### 【「灰色の金」で造られた地下迷宮】



ヴィエリチカ岩塩坑の表玄関である  
ダニウオウィッチ立坑  
(写真/Rafal Stachurski)

ポーランド共和国南部にある古都クラクフ近郊の町ヴィエリチカ。この町の地下に蟻の巣のように広がるヴィエリチカ岩塩坑は1996年に採掘を終えたが、現在もその美しさで年間100万人以上の観光客を魅了し続けている。

この岩塩坑は深さ327mの9層構造で、約3000の大小の広間があり、それぞれが総延長300km以上に及ぶ地下坑道で結ばれている。ただし、観光客に公開されている坑道は、地下64m～135mにある約2kmに過ぎない。そこには広間や礼拝堂、地底湖などが点在し、岩塩に精通した熟練の坑夫たちによって代々彫り上げられてきた彫像やレリーフが数多く並んでいる。この広大な岩塩坑は、数百年にわたる岩塩採掘技術の発達史そのものである。

### 【果てしなく続く湿気、地下水との戦い】

しかし、この世界遺産のヴィエリチカ岩塩坑もかつて危機遺産リストに登録されていたことを忘れてはならない。原因は、時間の経過とともに坑内の湿度が狂い、一部の岩塩製モニュメントが著しく劣化し始めたからである。

その当時の状況の深刻さは、聖アントニ礼拝堂を見れば一目瞭然である。この礼拝堂は17世紀末に造られた現存する最古のもので、堂内に入ると彫刻などが本来の姿が想像出来ないほど崩れているのがよくわかる。湿度の急激な変化に従来の換気装置では対応し切れなかったのである。したがって、1989年にこの岩塩坑は危機遺産リストに登録された。その後1992年の大洪水で被害はさらに拡大したが、様々な国際的資金援助による救済活動のおかげで、1997年に空調設備が整えられ、坑内の温湿度が一定に保たれるようになった。そしてようやく1998年に危機遺産登録が解除されたのである。

ただし、岩塩は非常にデリケートで、湿度の微妙な変化にも反応するため、現在でも細かい損傷は頻繁に見られ、決して油断はできない。聖アントニ礼拝堂とは対照的に見事な彫像やレリーフが立ち並ぶ聖キング礼拝堂でも、天井をよく見ると坑内に流れ込もうとした地下水の跡が残っている。私を坑内に案内してくれた、この岩塩坑の元ベテラン坑夫で、現在ガイド



聖アントニ礼拝堂にある十字架のキリスト像  
(写真/Rafal Stachurski)

を務めているヤヌシュ・ザヨンツさんが「この岩塩坑は自然の一部であって、自然は人間による干渉から自らを守ろうとするもの。自然の変化を予知することはできないから、いつ何が起るかはわからない。常に見守っていなければなりません」と力説していたのが印象的である。つまり、この岩塩坑では、危機遺産登録の有無に関わらず、常に岩塩の状態に細心の注意を払う必要があることに変わりはないのである。



観光坑道一番の見所である聖キング礼拝堂 (写真/Rafal Stachurski)

### 執筆者プロフィール

森田 耕司

大阪生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員を経て、現在はポーランド科学アカデミースラブ学研究所及びヤギェロン大学東洋学研究所准教授。博士（言語学）。



**AIU保険会社**  
エイアイユー インシュアランスカンパニー  
A Member of American International Group, Inc. **ATG**

〒100-8234 東京都千代田区丸の内1-1-3  
旅行保険カスタマー・センター  
03-5611-0799  
www.aiu.co.jp/travel

AIU保険会社は、  
世界遺産アカデミーの活動を  
応援しています。

